

非行臨床における ジェノグラム（Genogram）の活用

村 松 励

I. はじめに

非行臨床は心理臨床の一分野であり、「犯罪・非行」といった司法手続きを経た対象、つまり、少年法第3条に規定された非行を犯した少年が主たる対象となる。非行臨床の目的は、非行を犯した少年の内的資源（資質）の発見と涵養、内的資源と少年の健全育成を促す外的資源に結びつけることによって、再非行を防止することである。

犯罪・非行を犯した少年やその家族に対する心理的な援助に関する方法や技法は多岐にわたる。その多くは心理臨床の理論や実践の中から、非行臨床に援用されたものが多く、非行臨床に特化した技法は極めて少ない。非行臨床におけるジェノグラムの活用もしかりである。本稿では非行臨床の実践においてジェノグラムを具体的にどのように活用するのかを論じることを目的としたものである。また、非行臨床の分野のみならず、一般的にジェノグラムを心理臨床に活用している臨床家はわが国では数少ない（中村 1991；中村 2009；市村 1994）。

このようなことから、非行臨床におけるジェノグラムの活用について紹介する価値は少なくないと思われる。また、ジェノグラムを用いた面接（ジェノグラム・インタビュー）は、家族療法の技法の一つである（Rivett & Street, 2009）。

Ⅱ. ジェノグラムを作成する

ジェノグラムは家系図とか世代関係図と訳されることもあるが、単なる家系図と誤解される危険性も高いことから、家族療法での慣用にしがたってジェノグラムと呼ぶことが相応しいと思われる。ジェノグラムとは、McGoldrik, Gerson, and Shellenberger (1999 石川他訳 2009) の訳者である石川の「訳者あとがき」によれば、GEN-O-GRAM で構成された新造語であり、ここでの GEN は GENERATION を意味する。しかもこの GENERATION には血のつながり、一族という単なる生物学上の系譜を超え、世代間相互作用という心理学上の含みが課せられていると言う。

経験の豊かな臨床家はこのジェノグラムから家族のアセスメントのために、実に多くの仮説を立てることができる。また、ジェノグラムの作成過程そのものが家族とのジョイニング (joining)、つまり支援や治療関係を形成することに繋がる。ジェノグラムは、家族のアセスメントや家族への適切な介入のヒントを多く与えてくれることから、家族療法を取り入れている臨床家の一部はジェノグラムを積極的に使っている。最初にジェノグラムの作り方について McGoldrik and Gerson (1985 石川他訳 1988)、McGoldrik, Gerson, and Shellenberger (1999 石川他訳 2009)、中村 (2002) を参考に基本的な点を紹介する。

ジェノグラムの作成は、つぎの3つに分けることができる。①家族の構造を図式化する。②家族に関する情報を記録する。③家族の関係性について記録する。

初回面接で家族についてすべての情報を入手することはもちろん不可能であり、面接を重ねるなかで情報も積み重なっていくのであるが、基本的な情報は最初の数回の面接で押さえておくことが望ましい。年齢や職業、学歴といったものは、後になるほど聞きづらいこともあるからである。また、家族と一緒にジェノグラムを完成するといったスタンスを保つことによって、家族の主体性が高まるのである。特に家族に「教えてもらう」といった態度で臨むことが好ましい。

1、家族の構造を図式化する

図1は、性別の表記法である。臨床現場においては、○を男性、△を女性にしているところがある。例えばわが国の家庭裁判所である。□を男性、○を女性と統一した方が関係機関で共通したジェノグラムの表記が望ましく、関係機関での混乱も少ないと思われる。図2は中心人物（IP）の表記法を示したものである。IPとは、Identified Patientの頭文字をとったもので、「患者とみなされた人」といった意味である。つまり、家族や周囲の者たちから「病気である、おかしい、困っているからなんとかして欲しい」と思われたり、言われたりしている人といった意味である。非行臨床においては、非行を犯した少年のことである。

図3は、誕生年と没年を表記し、亡くなった時の年齢を書き入れている。例えば若くして亡くなったりした場合、ジェノグラムを読んでいく際、重要な意味を持つことが少なくないからである。また、図4のように家族構造の表記は、妊娠や死産、流産など細かく分かれている。このような細かい表記が複雑な家族をアセスメントしていく上で重要になってくる。



図1 性別の表記法



図2 中心人物の表記法

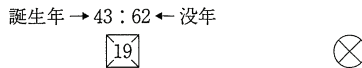


図3 誕生年と没年



図4 妊娠、流産、中絶、死産の表示法

図 5～図 8 は、婚姻関係、別居、離婚についての表示を示したものである。図のmは、marriage（結婚）、dはdivorce（離婚）、sはseparation（別居）をそれぞれ意味する。英語の小文字で表記しておくことあまりスペースを取らない便利さがある。複雑なケースによっては別居や離婚を繰り返す場合が多く、特に、非行臨床では複雑な家族関係を表記することが少なくない。

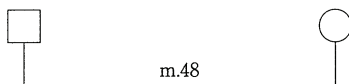


図 5 婚姻関係 (m)

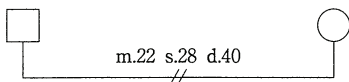


図 6 別居 (s)・離婚 (d)

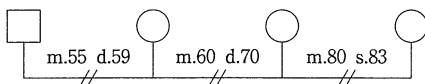


図 7 何度も結婚歴のある夫

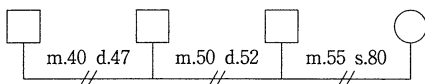


図 8 何度も結婚歴のある妻

図 9、10 は、共に結婚経験のある夫婦や過去の結婚相手もそれぞれ再婚している夫婦の例である。図 11、内縁関係は点線で表記し、出会いの年も記載しておくことが望ましい。交際期間の長短はその後の結婚生活にいろいろな影響を及ぼすからである。図 12、同胞の出生順位は左から表記される。図 13 のように、双子の場合は、二卵性と一卵性との区別がなされている。また、いつ頃、何歳で家を離れて独立したかの表記も LH (Leaving Home) といった工夫がなされている。同居している家族を点線や赤線で囲っておくことが望ましい (図 14)。その他必要に応じて、臨床の現場で表記を統一すること

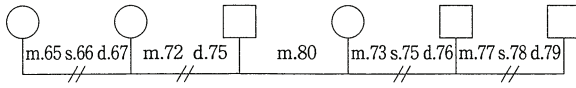


図 9 共に結婚経験のある夫婦

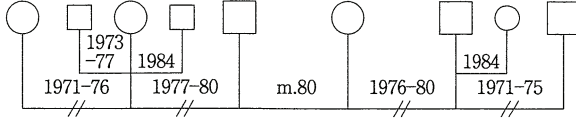


図 10 過去の結婚相手もそれぞれ再婚している夫婦

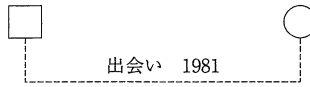


図 11 内縁関係

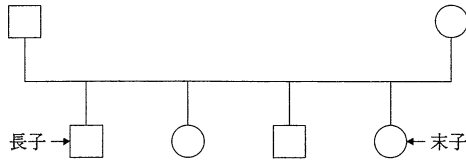


図 12 同胞の出生順位

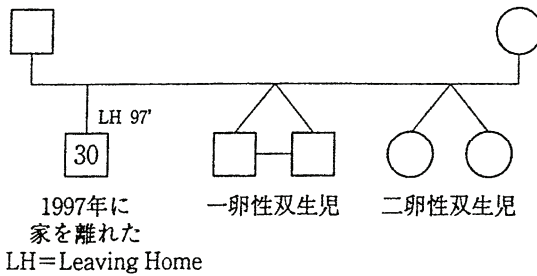


図 13 双子の表示法

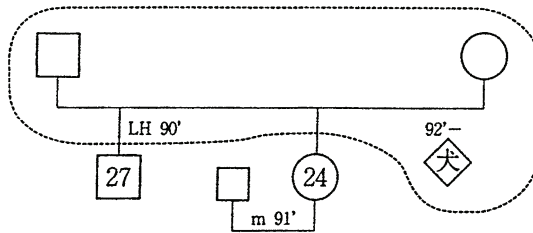


図 14 同居の表示法

が求められる。

2、家族に関する情報を記載する

家族に関する情報は、面接を重ねる段階で徐々に加わっていくもので、全てが一度に収集されることはない。このことは家族構造の図式化と同様である。どのような情報が重要かは、ケースによるのであるが、ここでは比較的重要と思われる一般的な事項を取り上げ、なぜそのような情報が重要なのかについてその理由についても述べることにする。人は不思議なもので問われなければ、家族関係やそれにまつわる出来事を生涯考えないで過ごしてしまうことが多いのである。それ故に逆に問われて初めて、考え出すことにもなるのである。

① 年齢について

父母間の年齢差、きょうだい間の年齢差の有無は重要な情報となる。不自然な年齢差に注目するのである。例えば、妻の年齢が夫より一回り年上であるような場合、結婚当初から夫が妻に依存的であったかも知れないからである。

② 職業について

特に、転職の有無やどんな仕事に就いてきたのか。結婚当初の夫婦の職業はなんであったか。また、無職期間の有無も重要である。対人関係のスキルの乏しい人は、比較的一人でやれる仕事、例えばダンプの運転手やコンビニの裏方などをすることがよくある。

③ 出身地について

夫婦共に同郷であるのかどうか、育った地域の文化が大きく異なっているのかは重要である。例えば、夫は沖縄県、妻は北海道出身でそれぞれ上京して所帯を持った場合などで、自分が馴染んだ地域文化を夫婦関係に持ち込もうとするからである。文化の差異が夫婦関係の葛藤に影響を与える場合も少なくない。

④ 結婚のいきさつについて

中村（2002）では、恋愛結婚と見合い結婚を別の表記を工夫することの提案がなされ、lo. m (love marriage)、ar. m (arranged marriage) と表記が工夫されている。また、たんに恋愛か見合いかといった形式的なものにとどめることなく、結婚を決意するに至った事情などが重要である。周囲の賛成を得られた結婚であったかどうか。結婚に反対された人の有無やその場合誰が反対したのか、その理由も重要である。いわゆる「できちゃった婚」などは、婚姻時期と長子の年齢などから判断できるであろう。

結婚を決意するに至ったいきさつや結婚した相手の見どころについて改めて問われることは、仮に現在の関係が破綻に瀕していたとしても、返答に窮しながらも答えるものである。

⑤ 別居や離婚のいきさつについて

夫の暴力、妻の浪費など別居に至った事情も重要である。また、別居期間中の生活の過ごし方は重要な情報となる。つまり、別居期間中の生活を誰が、どのように支えていたかなどである。別居期間に離婚調停の申立てをすることも少なくない。その場合、妻側からの申立てなのか、夫側からの申立てなのかも重要となる。

離婚の場合、離婚に至った事情や協議離婚、調停離婚の区別は重要である。調停離婚の場合、主な争点がどこにあったのか、例えば、親権をめぐるの対立であったのか養育費をめぐるの争いであったのかなどである。

⑥ 転居につて

特に子供が小さい時の頻繁な転居などには注意を払いたい。非行臨床ではすべてのケースで必要となるわけではないものの、職権で戸籍謄本を取り寄せ、戸籍の附票から客観的な事実関係を入手できる。虐待が疑われるような

場合、発覚を怖れて頻回転居が見られるケースがあるからである。

⑦ 収入・学歴について

父母の収入・学歴などはインテークや受理時の照会書等に記載してもらうと心理的な抵抗が少なく済む。経済状況は家族の常態的なストレスを知る上で重要となる。例えば、長期に及ぶローンの返済など、経済状態を知る上で大切な情報である。

⑧ 非行・犯罪歴の有無について

すべてではないが、ケースによっては前科照会も必要である。親の服役歴などである。家族に反社会的な文化が定着しているようなケースも散見されるからである。

⑨ 死亡日時・死亡原因について

病死については、できる限り病名も聞いておく、また、家族員が長期間患ったような場合、誰が介護したのか。ケースによっては、事故死や自殺などがある。そのような情報は家族構成員の一部にしか知らされていないことが少なくない。

⑩ 疾病の有無について

図 15 の表記のとおりである。アルコール依存のほかに覚せい剤や大麻などの薬物の使用歴、断酒会やダルクといった自助グループへの参加などによって回復過程にあるかどうかといった表記である。ジェノグラムに薬物依存の表記が数多く認められることはめずらしくない。

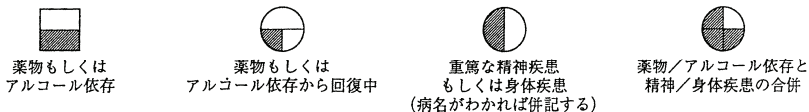


図 15 疾病の表記法

⑪ 子の名付けについて

誰が名付け親なのか、命名に込められた期待などである。夫婦共に年齢が若くして結婚し、精神的に未成熟な場合、劇画などに影響された名前を付けたり、判読困難な命名が見られたりする。

⑫ ペットについて

家族の一員であるかのようなペットを、いつから誰が飼っているのか。実際の世話は家族員の誰がやっているのか。ペットが家族に飼われる場合、その家族にとって何らかの必然性が存在しているからである。

中川・立木（1995）では、非行臨床において、ペット（動物）を飼うことの心理的意味について、精神的発達過程や家族力動との関連から考察がなされている。ペットを飼ったからといって治療的意味があるのではなく、まさにそのクライアントが求めているとき治療的な意味が生じるのだと指摘されている。尚、中村（2002）においては、ペットをひし形で表記し、内側に犬などペットの種類を表記することを提案がなされている（図 14）。

⑬ 家族以外の同居人の有無について

不道德な家族によく見られるが意外な人が同居していたりするからである。例えば、暴力組織構成員の父子家族に、配下の同じ構成員が同居したりしていたりする。

⑭ 家出・失踪について

現在、もしくは過去に家出や失踪をしていた家族の一員の有無についての情報を収集する必要がある。非行臨床には、家出が少なくないからであり、小川・石井・岩武・辻村・五百木・柏原（1994）においては、家出の事例についてジェノグラムを用いた研究の紹介がなされている。家出に関する特別調査項目として、家出の期間、立ち寄り先、帰宅の様子などといった家出を伴う虞（ぐ）犯事件の調査項目を挙げている。親が捜索願を警察署に出したかどうか重要な情報であろう。

以上のような基本的な情報については、最低限 3 世代に遡って聞いておく。もちろん家族によっては、4 世代遡ることもあろうが、重要な点は、子どもが現在どのような家族関係の中で育ち、親がどのような家族関係の中で大人になり家族を作っていったかである。家族アセスメントでは、親自身が自分の親から心理的、経済的に自立できているかどうかなど、親の原家族の情報の必要性を強調しておきたい。

3、家族の関係性、ファミリー・マップ（Family Map）について記載する

これはあくまでも面接した家族員から得た情報を元に作成されるもので、決して固定的なものでなく、面接が進む中で修正がなされたり補足されることはもちろんである。それよりもいつの時点で、誰がどのように関係性を認知していたのかが重要な情報である。次に、図 16 に従い関係性の表記の具体的な例を挙げる。

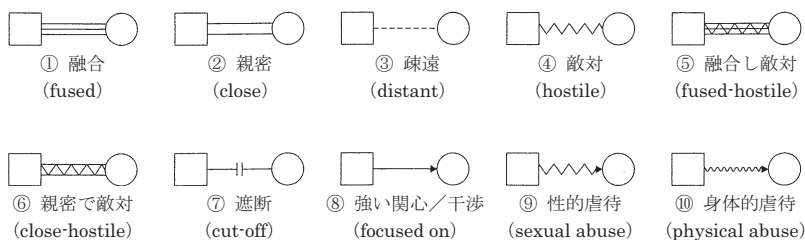


図 16 Family Map のなかの家族関係表記法

- ① 3 本線で表記：融合（fused）している関係である。密着した、べったりした、一心同体であるといった関係であり、心理的母子密着、癒着などといわれるような関係である。母親の不安が強い場合、子どもと心理的に密着するケースが少なくない。
- ② 2 本線で表記：親密（close）な関係である。お互いに適切な距離を取れており、発達を阻害するような関係ではなく、むしろ促進的である。
- ③ 点線で表記：疎遠（distant）な関係である。あることがきっかけとなって、実家とは疎遠であるとかきょうだいとの交流はないなどの場合に表記される。遺産相続などで揉めたりしたことがきっかけとなることよくある。
- ④ ギザギザ波線で表記：敵対（hostile）する関係である。仲違いなど関係がぎくしゃくし、葛藤の生じている関係である。例えば、嫁舅の確執などに典型的に現れるような葛藤である。
- ⑤ 3 本線とギザギザ波線で表記：融合し敵対（fused-hostile）する関

係である。このような関係性のある家族の場合、家族員間に不安が伝播しやすくなり、家族関係が不安定となる。例えば、家庭内暴力の母・息子関係や夫婦間暴力の夫婦に典型的に見られる。

- ⑥ 2本線とギザギザ波線で表記：親密で敵対（close-hostile）する関係である。融合し敵対する関係のように家族員の不安は少ない。例えば、思春期の一過的な親への反抗や、一過的な兄弟喧嘩もこれに相当する。
- ⑦ 横線と二本の縦線で表記：遮断（cut-off）された関係である。古典的な言い方だが、「縁を切った」とでも表現されるような場合である。例えば、実家の兄夫婦とは亡父の遺産分割で揉めてから没交渉であるなどといった例がこれに相当する。
- ⑧ 矢印で表記：強い関心・干渉（focused on）の関係である。過保護や支配的な関係が窺えるような場合である。非行臨床では、世代を超えて祖父母が孫の生活全般に口を挟み、干渉や支配をするといったようなケースが少なくない。これは、家庭裁判所調査官研修所（2001）の重大少年事件の実証研究においても指摘されている。
- ⑨ 波線と矢印で表記：性的虐待（sexual abuse）がある場合である。女子少年の性非行の場合、性的虐待と非行化の関係が密接であると言われる（家庭裁判所調査官研修所、2003）。また、性的虐待についての質問方法については、村松（1997）では、二次的トラウマを回避するための方法が紹介されている。
- ⑩ 細かい波線と矢印で表記：身体的虐待（physical abuse）がある場合である。橋本（2004）においては、虐待と非行のメカニズムが論じられる中で、虐待と非行のタイプの特徴についてまとめられている。また、籠田（2001）では、被虐待経験をもった非行少年の事例が詳細に報告されている。上記の虐待に加えて、心理的虐待や養育放棄（ネグレクト）の表記についても、家庭裁判所や児童相談所などの機関においてはそれぞれ工夫の余地があろう。その際も、統一した表記を使用すれば関係機関に記録が回った際、共通したジェノグラムでのアセスメントが可能となる。

Ⅲ. ジェノグラム・インタビューの留意点について

ここでは、実際にジェノグラムを作成しながら面接を進める際の基本的な留意点について説明する。

1、ジェノグラム作成の時期

1 回や 2 回の面接で、先述した事項について漏らすことなく聞くということとはありえない。しかしながら、既に述べた通り面接開始の早い時点で基本的な事項を聞いておくとよい。基本的な事項は後から聞くのは、「今さら何を」といった印象を与えかねないからであり、気まずさが伴うものである。適宜、インテークの時に書面に記載してもらうなどの工夫は多いになされるべきであり、クライアントの心理的負担も少なくなるからである。

2、基本的なスタンス

面接室にホワイトボードを用意し、家族とホワイトボード上にジェノグラムを作成していく。家族と一緒にジェノグラムを完成していくといったスタンスが望ましい。「聞かせていただく」「教えて欲しい」といったスタンスが家族の主体性や能動性を高めるからである。「辛いことや悲しいこと、思い出したくないこともあるかと思います。どうぞ、ご無理をせずに」といった具合である。また、聞いた後では次のような手当てが必要となる。「辛いことを思い出させてしまったようで、恐縮しています。古傷に触ってしまって申し訳ない。子どもさんの理解や今後の援助にぜひ役立てたい。協力して戴いて感謝しております。」と言うのも一つの工夫である。情報収集の過程での無理強い禁物である。これは、非行を犯した少年よりも親自身のトラウマの方が深刻であるようなケースが少なくないからである。このようなスタンスが取れないと、家族に「根掘り葉掘り聞かれた。」といった被害感を抱かれてしまうことになる。このような面接にならないように細心の注意が必要である。

McGoldrik and Gerson (1985 石川他訳 1988) には、取るに足りない質問のように見えても、家族の秘密を暴露してしまう危険性のあることが指摘されている。時には家族に恥の感情を起こさせてしまったり、嘘を強要して

しまうことになるからである。

IV. ジェノグラムを読む

ジェノグラムが完成されると、家族関係をより深く理解することが容易となる。面接を受けている家族もジェノグラムを通して、自分自身の家族について思いがけない発見をいろいろすることになる。

ここでは、どのようなことに留意してジェノグラムを読んでいくのかといった点について述べることにする。

1、世代を超えて持ち越されるパターン

多くの場合、人は親から育てられたように、自分の子どもを育ててしまう。親から手を掛けられなかった人は、自分の子どもに手を掛けることは少ない。「自分もほったらかしにされて育ったせいか、子どももそのようにして育ててきた」といったエピソードはよく耳にするところである。

世代を超えて持ち越されるパターンとしては、暴力、過保護（溺愛）、放任などが挙げられる。親の養育パターンをこのような視点から見ると、親を一概には責められないことを実感する。親と敵対関係にならないようになるためにも親がどのように育てられたかの情報の重要性は強調し過ぎることはないのである。

2、注目すべき二者関係について

最初に注目すべきは夫婦の関係性である。多くのケースにおいて顕在的な夫婦葛藤や潜在的な夫婦葛藤が窺われるからである。前者の葛藤は容易に見て取れるが、後者の葛藤は分かりにくい。前者の典型例はDV（夫婦間暴力）であるが、後者の場合、何日間も口を利かない夫婦のように「陰湿さ」をその特徴とする。つぎに、親子関係に注目する。なかなか子どもたちに平等に関われないことが少なくなく、末子を溺愛したり、長子に厳しかったりするものがよく見られるパターンである。このパターンは自分の原家族での親との関係性を反復しているかどうか注意して読んでみる必要があろう。

3、注目すべき三者関係

基本的には父母と子の三者関係である。葛藤がある夫婦の場合、子どもとの関係が歪む場合が少なくない。夫婦間の葛藤が表面化することを恐れ、妻や夫への攻撃性が子どもに迂回（detouring）して向かう八つ当たり、いわゆる迂回攻撃が多いからである。この家族内の迂回という現象を記述したのは、構造学派の Minuchin（1974 山根監訳 1983）である。亀口（2000）においては、このような家族を迂回攻撃型家族と類型化がなされている。また、迂回は攻撃のみならず、親の一方が子どもと密着したり、過剰な保護を加えることも少なくない。迂回保護型家族と呼ばれている。夫婦葛藤のバイパスとして子どもが利用されることになるのである。

この現象について、Kee and Bowen（1988 藤縄監訳 2001）では、三角形（triangle）と呼ばれており、以下のような 4 つのタイプが認められる。二者関係に不安が増加すると第三の人を巻き込むことによって、二者関係の不安を軽減しようといったものである。三角形にはこの他にも、安定した二者関係は第三の人が加わることで不安定になる。例えば、調和のとれた夫婦関係は、子どもの誕生後、葛藤が多くなる場合などがそれである。安定した二者関係は、第三の人の撤退で不安定になることもある。例えば、子どもが自立して家を出たとたんに、夫婦の葛藤が表面化する場合である。また、不安定な二者関係は第三の人が撤退することで安定する。例えば、二者のいずれかの肩をもっていた第三者が撤退することで、二者関係が安定する場合である。このように作成されたジェノグラムに三角形を見出すことは、臨床上よくある経験の一つである。三角形に関するいくつかのパターンの理解は、ホワイトボード上に表記されたジェノグラムを家族と一緒に読み解くこと、そのプロセス自体が家族への介入となる。

V. ジェノグラムによる家族への介入のポイント

家族関係のどの関係性に介入したら効果的な家族システムの変化に繋がるかといった点は、数多くの実務での経験を重ねる中で培っていくものであるが、家族システムについての基本的な考え方は次のとおりである。家族を一

つのシステムとして捉えて、家族のシステムの変化を通じて家族構成員の問題行動の消失を図る方法を、家族療法ではシステムズ・アプローチと呼ぶ。家族のある構成員に問題が生じた場合、その構成員にのみアプローチするのではなく、サブシステム（夫婦・父子・母子・きょうだい）に働きかけることで、家族全体のシステムが変わり、その結果として問題となっている家族構成員にも変化が生じるのである。また、必ずしもサブシステムにのみ働きかけるのではなく、サブシステムを構成している父親や母親といった家族構成員に働きかけることもある。

3人家族の場合、二者関係のサブシステムは3つであるが一人増えると倍の6つになる。それだけ複雑な家族システムとなる。ちなみに三世代家族のように6人となれば、15のサブシステムからなるのである。つぎに、家族に介入する際の基本的な原則を以下に挙げておきたい。

1、無理のない介入

これは、家族に何らかの課題を与える際に、もっとも優先されて考慮されるべきことである。家族にとって与えられた課題の実行が容易であること、日常生活などに支障をきたさないことである。ある家族員には好感が持たれ実行が容易であるが、他の者には悪意として感じられてしまうような課題は好ましくない。例えば、父親と兄と二人で父方の実家を訪ねるといった介入で弟が疎外された感じを抱くようであるならば、それは適した家族への介入とはならない。

2、家族システムへの波及効果

たとえ、家族の一人に対して課題を与えたとしても、家族システム全体に変化が生じる課題が望ましい。週末は必ず家族と一緒に食事を取るといった、一人の家族構成員への介入は他の家族構成員にも少なからぬ影響を及ぼすことになる。もちろん、どうして自分だけがやるのかといった被害感を抱かれないように課題を与える際には十分な配慮が必要となる。

3、課題を与えた後のフィードバック

家族に与えた課題がどのように遂行されたかをフィードバックしてもらうことが必要である。また、遂行されなかった場合には、どのような理由から実行されなかったのかについても情報を得ておく。抵抗の強い家族には課題を与える際に、「おそらく無理かもしれませんが」「きっとやって戴けないかも知れませんが」といった前置きをおいておくことと実行の可能性が高まることもある。もちろん、無理難題は慎まなければならない。

ジェノグラムの作成の過程で、家族とのジョイニングがしっかりできていれば、課題の実行に抵抗を示す家族は少ない。つぎに、家族に介入するための具体的な課題を紹介する。

4、課題の具体的な例

非行臨床で比較的用いられるいくつかの具体的な課題の例を挙げて、どのような家族や親子関係に有効かを検討してみたい。「週末は家族全員が揃って食事をする」といった課題では、家族のコミュニケーションの促進が狙いである。和田（2003）によれば、薬物乱用の非行傾向のある中学生の実態調査の結果、非行傾向のある中学生に家族と一緒に食事をしないといった頻度が高いことが報告されている。家族と一緒に食事を取るといった、一見些細な課題の実行でもそれがきちんと実行されると家族関係に変化がもたらされる。

「父親と息子が二人で釣りに出かける。」「母親と一緒に料理をつくる。」といった課題は、親子関係に介入するために使われる課題の一つである。最初の課題は、「子どもが小さい頃は、よく釣りに行ったものです。」といった父親の言葉を受けて、課題として提案したもので、その後の感想を聞いたところ、親子共々久しぶりの釣りを喜んでいた。家族や親子といった関係は、自らの力で変化することは困難な場合が多い。このような場合、具体的な行動レベルでの課題の提案が変化に繋がることは少なくない。特に家族構成員が共同して何かをするといった行動レベルでの介入は家族にシステム変化をもたらす基本的な介入の一つとなる。例えば、家族全員で描画をするなども一つの介入である。合同描画による家族療法の事例が早樫（1998）に紹介されている。

料理の課題の例は、「カレシ」との交際に夢中で、母親とのコミュニケーションが少ないケースへの介入である。「カレシ」の好物がハンバーグであることが分かったので、お母さんと一緒に次の面接までにハンバーグを作るといった課題を与えたのである。「娘とキッチンに立ったのは久しぶりでした。お互い話らしい話はしませんでした。娘もまんざらではない様子が手に取るように分かりました。」「お母さんと一緒に料理をするなんて、小学生以来かも知れません。ハンバーグを作るのがこんなに大変だったとは夢にも思いませんでした。お母さんが料理上手であることを改めて知りました。」このように久しぶりに母親とキッチンに立って、話は弾まなくとも、一緒に作業することの意味は大きい。

つぎに「父方の親戚を訪ねて、父親の子ども時代の話聞いてくる。」といった課題の例を挙げる。これは、反抗期にある子どもが、自分と同じ年のころの父について父方の親戚（父方祖父母やおじ・おばなど）の人たちから聞いてくる課題である。父親はきかん坊でよく叱られていたこと、兄弟喧嘩をして祖父から叱られ裏庭の松の木に縛られたエピソードなどを聞き出すことで、父親を身近な存在として内在化していく。このように家族や親子関係の問題に応じた課題を練ることが大切である。コミュニケーションが乏しい家族や、親との心理的な距離が遠い家族にどのような課題を提案するかは、臨床を重ねる中で少しずつ磨かれてくる。

非行臨床に携わる家庭裁判所や児童相談などの公的機関の臨床では、奇抜な介入は極力避けたい。即効性には乏しくとも、穏やかで、効き目のある介入を心がける必要がある。課題を達成できたことも、家族の自信に繋がるからであり、無理な課題を与えることは控えなければならない。同じ趣旨のこととして開業医の立場から中村（2008）においても戦略的もしくは逆説的な指示は出さなくなっている」と述べられている。

5、ジェノグラム・インタビューの実際

ジェノグラム・インタビューがどのように具体的に成されるかについて、改めてまとめてみたい。

ジェノグラム作成では、面接室にホワイトボードを用意し、家族と一緒に

ジェノグラムを完成するようにするが、前述した全ての項目を聞く必要はなく、ケースによって項目を絞ることが望ましい。非行臨床においては、できるかぎり前述した項目を意識し、ケースに応じてどのような事項が最優先するかを押えておくと思いわれる。面接では子どもの良い点や取り柄、見どころを確認しそれが家族の誰譲りかを最初に聞くと、家族とのジョイニングがスムーズに進む。具体的にはつぎのような展開となる。セラピスト：「子どもさんの良いところを一つ教えてください。」保護者：「良いところなんかありません。」セラピスト：「夜空は真っ暗闇で何一つ見えないこともあります、目を凝らすと星が一つ二つ見えることがあるように、一つぐらいは見つかるものですが。」保護者：「気持ちのやさしいところはある。」セラピスト：「どのような時に、子どもさんのやさしさを感じるのでしょうか。教えてもらえるとありがたい。」保護者：「私が熱を出して寝込んだ時、水枕を用意してくれるのはこの子だけです。」セラピスト：「子どもさんのやさしさはこのジェノグラムのうちの誰譲りでしょうか。」保護者：「亡くなった私の父親に似ています。父親も気持ちの優しい人でした。」このような会話が進むなかで、保護者は自分の父親と息子が似ていたことが想起される。このような体験は日常生活では体験されることは少なく、実際に問われないと家族関係の気付きは生じないのである。このような問いがなされるなかで、ジェノグラムはさらに完成されていく。

6、社会的資源の発見のためのジェノグラムの活用

子どもの問題を深刻化させてしまう家族の多くが、親族システムや地域から孤立しているといった問題を抱えている。このような家族にどのような援助が可能かという、家族はもちろんのことサポートシステムとして機能してくれそうな親戚縁者や友人知人などの発見である。「子どものことで今まで実家やごきょうだいに相談されてきた人はおりますか。」といった問いが有効である。親のきょうだい（少年から見るとおじ・おば）の援助が得られるかどうかは重要である。親子関係が「縦の関係」であるなら、おじ・おばといった「斜めの関係」は思春期の少年には、親には素直になれなくても、おじ・おばには素直になれるといったことが少なくない。もちろんおじ・おばの存

在が重要なのであって、その代わりをしてくれる第三者であっても構わない。

村松（2008）においては、高校中退後暴走族に加入して対立する暴走族との抗争事件を犯し、逮捕された甥を伯父が手元に引き取り面倒をみるなかで、更生を果たした非行少年の事例の紹介がなされている。また、保護者の知人が経営する牧場で夏休みの期間、家畜の世話をするなかで更生した事例などは非行臨床ではよく見られる。

社会資源を発見することこそ非行臨床の重要な課題である。もちろん、親族だけではなく、学級担任やスクールカウンセラーなどが少年の援助のための社会資源として活用できるかどうかといった見極めも重要である。つぎに、事例検討をするなかで、ジェノグラムの活用の具体的なあり方を見ることにする。

Ⅵ. 複雑な家庭に育ち、4人の女性に育てられたA子の事例

1、非行の概要

A子（17歳）は、共犯者のF子（17歳）から被害者であるU子（16歳）を締める（リンチする）から手伝って欲しいと頼まれ、仲間から頼まれた以上断る訳にはいかないとといった動機から傷害事件に至ったものである。犯行時、A子は前日使用していた覚せい剤の影響で体がだるかったことから、犯行に至る直前に再度覚せい剤を使用している。「覚せい剤を使うと一つのこと集中できる。（被害者を）徹底的に殴ってしまったのは、覚せい剤の影響かもしれない。」とその残忍さを説明する。

2、面接の経過と考察

A子は逮捕され身柄事件となり鑑別所に入所後、家庭裁判所で試験観察（少年法第25条）となり処分が保留され、筆者が家庭裁判所調査官として相当期間指導することとなった。色白で整った顔付きのA子からは、陰惨な事件と多少不釣り合いな印象であったが、この激しい怒りは生育史のなかで長く蓄積されてきたものであることは容易に看取できた。

く楽しく過ごせたのにと不満を述べる。小学校に引き続いて中学校でも陰湿ないじめにあう。A子が13歳の時、父親は3人の子連れである内妻と同居し現在に至る。A子はこの内妻を「おばちゃん」と呼び、親和感情を抱いているが、一番上の連れ子とは仲が良くない。

A子は、ジェノグラムを作成していく中で、継母に一番懐いていたことを思い出し、涙声で「やさしい人だった」と述懐した。また、父親の実家に預けられていた際、実母が突然小学校に訪ねてきたことを想起した。「母には余りいい思い出がなかったので、逃げて帰ってきてしまった。今から思えば、悪いことをしたと思う」と述べた。

A子は高校に入学するも、校則違反が続き、1学期で退学する。退学の一件を巡って父親との軋轢が増し、A子はアルバイトで貯めていた20万円を持って都内に家出する。ナンパされた男の家に泊めてもらい、そこで大麻を覚える。父親がA子の居場所を突き止め、連れ戻すものの、父親が寝てから夜遊びに出ることになる。その後、父親が見つけてきたガソリンスタンドの店員のアルバイトをするが、本件非行の数ヶ月前に再び家出、共犯者のF子を通じて不良交友が広がる。F子の付き合いしていた男が元暴力団組織関係者で、二人で男のアパートで覚せい剤を炙って吸引する。

事件後、自宅に戻ったA子は、週に一回筆者との調査面接を受けることになり、ジェノグラム・インタビューの過程で、複雑な家庭に育ったが複雑な分だけ、「お母さんが沢山いるみたい。」と呟いた。面接には父親と内妻が揃って出席するなど、家族のまとまりを窺わせた。面接で父親は、内妻を入籍する意向を示した。ただし、内妻の一番下の連れ子が学校在籍途中で氏が変わることに抵抗を示しているので、中学校を卒業するまで待ちたいと配慮を示し、内妻も了承した様子であった。

A子は10年後（27歳）の自分の家族のジェノグラム（図18）を書き加えた。これは、筆者の10年後はどのようなになっているかといった質問に答えたものであり、ジェノグラムを利用すると想像しやすい。子どもは2人欲しいという。自分が一人っ子で寂しい思いをしたので、絶対、最低2人は欲しい。男の子がいいという。夫はダンプの運転手、男らしいから。休日は夫と二人でサーフィンをやる。同じ趣味の人がいいと付け加える。夫は自

分が作ったお弁当を持って出勤、それをアパートの2階のベランダから子どもを抱えて手を振る自分の姿を想像しながらA子は束の間の幸せ気分に慕っているかのようにであった。

生い立ちの中で人間関係に苦労した非行少年の場合、特に女子においてはこのように、まるで映画の一つのシーンのように具体的に将来の家族を夢見ることが少なくない。まさに、健気という言葉が適切であろう。

この家族においては週に一回、A子

と保護者が家庭裁判所に来所するといったことが、家族への介入になっており、来所の道すがらの親子の会話が家族関係の再構築に繋がっていると思われたことから、改めて課題は特に与えることはしなかった。面接では、家庭裁判所の帰りに内妻に買ってもらったフリースに手を当てながら「買ってもらった。」と目を細めた。父親も内妻も自分たちの「最後の家族」を作ろうとの決意が面接で語られた。その後、最終の審判で、A子は大検予備校の手続きを済ませたことを、裁判官に報告したのである。

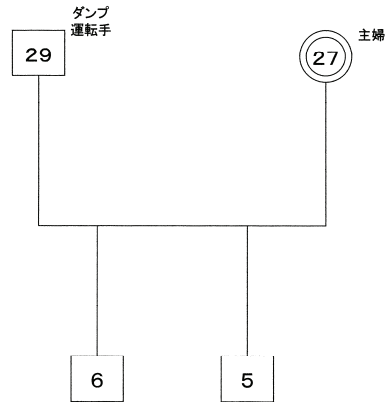


図 18 10年後のA子の家族

VII. おわりに

ジェノグラム・インタビューは家族療法の技法の一つであり、ジェノグラムの作成がすでに家族の関係性を変化させる介入になっている。面接において、自分の家族の関係性について改めて客観的に見ることによって多くの発見がなされるのである。A子の場合にも、不遇な生い立ちであったが、逆に「多くの母に育ててもらった」ことを発見したこともその一つである。ジェノグラムを用いることで、リフレーミング (Reframing) が自然になされたと言ってもよい。また、女性たちの仕事にホステスが多いのに驚き、ホステスという仕事が「ソト」で奉仕した分、「ウチ」をないがしろにしてしまう危険性がある。

ることを洞察めいた言葉で述べられるに至ったのである。

このジェノグラムの応用は、すでに McGoldrik, Gerson & Shellenberger (1999 石川他訳 2009) に見られる通り、社会的に成功した人物のジェノグラムから我々は多くのことを学ぶことができる。今後は心理臨床の領域のみならず、精神鑑定にも応用される日が近いのではと期待が持たれる。

引用文献

- 橋本和明 (2004). 虐待と非行臨床 創元社.
- 早樫一男 (1998). 児童相談所における家族療法の活用 生島浩・村松励 (編) 非行臨床の実践 金剛出版.
- 市村彰英 (1994). 刺青に支えられた少年—暴力団員から大検合格まで— 家族療法研究, 11 (2), 124-132.
- 籠田篤子 (2001). 被虐待経験をもつ非行少年についての一考察 調研紀要, 72 1-17.
- 亀口憲治 (2000). 家族臨床心理学 東京大学出版会.
- 家庭裁判所調査官研修所 (2001). 重大少年事件の実証研究 司法協会.
- 家庭裁判所調査官研修所 (2003). 児童虐待が問題となる家庭事件の実証研究—深刻化のメカニズムを探る— 司法協会.
- Kee, M. E. & Bowen, M. (1988). Family Evaluation : An approach on Bowen theory. W. W. Norton & Company, Inc., (藤縄昭・福山和女監訳 (2001). 家族評価 金剛出版)
- McGoldrik, M & Gerson, R. (1985). Genograms in family assessment. W. W. Norton & Company, Inc., (石川元・渋沢田鶴子訳 (1988). ジェノグラムのはなし 東京書籍)
- McGoldrik, Gerson, R. & Shellenberger, S. (1999). Genograms : Assessment and intervention 2nd Edition. W. W. Norton & Company, Inc., (石川元・佐野祐華・劉イーリン訳 (2009). ジェノグラム (家系図) の臨床 ミネルヴァ書房)
- Minuchin, S. (1974). Families and family therapy. Harvard University Press. (山根常男監訳 (1983). 家族と家族療法 誠信書房)
- 村松励 (1997). 非行臨床におけるトラウマと回復について 家族療法研究, 14 (8) 10-14.
- 村松励 (2008). 「宙ぶらりん」な生活をする非行少年の心理療法—「青年期混乱型非行」との関連から— 精神療法, 34 (2) 157-163.
- 中川望・立木昭子 (1995). 少年と動物—調査実務に現れる動物の意味— 調研紀要, 64, 108-123.
- 中村伸一 (1991). 思春期と家族 : 非行の家族を中心に 家族療法研究, 8 (2), 132-138.
- 中村伸一 (2002). ジェノグラムの書き方 : 最新フォーマット 家族療法研究, 19 (3), 57-60.

- 中村伸一 (2008). 家族療法—私の場合— 家族療法研究, 25 (2), 133–138.
- 中村伸一 (2009). 家族の歴史を治療に活かす 精神療法, 35 (1), 3–8
- 小川三千男・石井八重子・岩武洋史・辻村徳治・五百木亜紀子・柏原啓志 (1994). 家出を通して見た家族関係—女子少年のぐ犯事件に見られる家出を中心に— 調研紀要, 63.
- Rivett, M. & Street, E. (2009). Family Therapy : 100 key points & techniques. Routledge
- 和田清 (2003). 「薬物乱用に関する全国中学生意識・実態調査」平成 14 年度厚生労働科学研究費補助金：医薬安全総合研究事業研究報告.